２０１５年度特別研究期間　研究成果概要

文学部・教授　　嶺　秀樹

研究課題：　西田幾多郎の場所の論理の哲学的射程

研究期間：２０１５年４月１日～２０１５年９月２０日

研究成果概要

本研究期間においては、これまでの西田研究の成果（著書『西田哲学と田辺哲学の対決』ミネルヴァ書房2012年およびその後のいくつかの論文）を踏まえて、西田の場所の思想の持つ哲学的射程を検討した。そのための方法として採用したのが、他の哲学者との比較研究であり、とりわけ彼らに対する西田の批判の真意を探ることである。本研究期間において採り上げた哲学者はハイデッガーとショーペンハウアーである。

ハイデッガーに関しては、これまですでに取り上げたカントやヘーゲル、フッサールと比べて、西田自身あまり大きく取り上げたことはないが、西田哲学にとってのハイデッガー批判の重要性は他の哲学者に対するそれに比べて決して劣らない。特に日本におけるハイデッガー受容の要になったのが西田の自覚の立場からなされたハイデガー批評であると思われるので、今回は受容史という観点から、西田の「一般者の自覚体系」のうちに彼のハイデッガー批判を位置づけることを試みた。その成果は、雑誌『日本の哲学』（昭和堂）第16号で発表する。

ショーペンハウアーは、影響関係から言えば、西田哲学の内に重要な位置を占めるとは言えないが、西田自身が若い時に鼓舞された思想家でもあり、今回取り上げることにした（ショーペンハウアー協会から講演（本年11月）を依頼されたこともその契機となっている）。比較の視点を彼らの芸術論に定め、イデア理解の相違をもとに両者の基本的立場を比較し、西田の「行為的直観」の思想の特性を明らかにしようと試みた。

ちなみに本年6月には、親交のあるドイツ・フライブルク大学教授Günter Figal氏に招かれ、講演「西田とフッサール現象学」を行った。滞在費の一部はフライブルク大学が負担してくれているが、旅費を本研究費から調達したので、ここに記しておく。